魏晋唐小楷①

薦季直表（せんきちょくひょう）

二二一年
（魏・黄初二年）

木雞室
伊藤　滋

今号から、一般に「魏晋唐小楷」とされる王羲之を中心とする小楷の名跡を6回に分けて紹介していきます。最初は、魏の鍾繇の筆と伝えられる『宣示表』（平成18年9月号で紹介済み）とともに鍾繇楷書の代表作とされる『薦季直表』です。鍾繇七十歳の書であり、旧臣の関内侯季直を推薦する文章です。碑文の書とは異なり、帖として長い間人の手を経て伝えられてきたために信頼性を欠くが、その書は、楷書の古い様式を具えています。文字構成は上部が広く、独特の結構を示しています。起筆・終筆、払いなどの筆致も古い書体を感じさせます。この帖を刻したものに『真賞齋帖』や『三希堂法帖』などがあります。とりわけ、明時代の華夏の刻した『真賞帖齋』本が有名ですが、今回紹介するものは、別種の旧拓本です。『薦季直表』の墨跡本は清朝後期まで伝来したようですが、現在、不鮮明な写真が伝来するだけです。刻本の元になった墨跡本と刻本の文字との比較すると、それぞれの刻本の相違点が見られます。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。

伊藤　滋
メールアドレス mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

「薦季直表・全体」

「部分・やや拡大」

書道芸術院
平成の書（2010）

千葉蒼玄

財団法人書道芸術院
評議員・事務局長

二〇〇三年 千葉 蒼玄の世界（個展）四部作「天陽赫運」

天空

300×1000㎝

陽炎

300×1000㎝

赫々

300×1000㎝

運心

300×1000㎝

RUN FASTER THAN BEAUTY

何らかの契機がなければ良い作品は出来ないように思う。

書を始めたのが10歳（小学4年生）の頃からであるから40年以上も年月がたっていることになるが、本気で書の道に進もうと思ったのは高校生の時である。

思い返してみると夢中で走ってきた。若い頃は井の中の蛙であったが、その節目節目で良い師に巡り会え、教えていただいたことを基に歩んできた。

その私にも一つの契機があり、47歳の時、市役所を退職し個展を行った。（是で書をやめてもいいというぐらいの気持ちがあったことも確かである。）

その個展の中の一つ、大作四部作「天陽赫運」は今まで自分が培った技法感覚を全て出し切ったと思っている。いつかはこの作を越えるような作品を書きたいと願う。

天空は50㎝以上の特注の超長鋒を使い筆の回転と破筆による鋭さを出した。

陽炎は墨にボンドを混ぜ粘りのあるうごめきのある線を表現した。

赫々は濃紺の布に赤のポスターカラーで燃え上がるマグマのような厚みのある固まりを創った。

運心はケント紙に水で書きその上から墨とポスターカラーを流し込んだ。

人生には出会いもあるが別れもある。〝何らかの契機〟うれしいこともあるが、悲しいことの方が衝撃は大きいのかもしれない。

書のひろば

理事長　恩地春洋

「現代」という魔物に負けない情熱を

平成22年は、高校生の書のパフォーマンスで始まりました。マスコミは、暗い世相に元気と勇気を与えるために若者の力を借りました。

これをきっかけとして、伝統文化としての書に、色々な角度から光を当てようとしているようにも見えます。

本年、書道芸術院は63回展を迎えました。人も、団体も、社会も生き物です。その時、その時の実態の上に、最上と思われる目標を掲げ、行動に移してきました。

総合団体（寄り合い世帯）である書道芸術院は、それぞれの部や、総局、支局の自由な活動の上に立って、共通の目標（現代の書）を設定して努力してきました。私たちは、その立場を理解し、その長所、短所を自覚して芸術活動を展開してきました。

人間の命には限りがあります。一つの理想を追いつつも、世代は交替していくもの、先人の研究を、そのまま引き継げるとは言いきれません。研究内容や成果、運営活動も、リーダーの資質によって変貌していくものです。

例えば、いつの時代でも学書に取りあげられる王羲之の「蘭亭序」の臨書を見ても、明治、大正、昭和、平成という時代と人（個性）によって香りが違っています。基本的な技術は同じでも、明らかに時代の匂いがします。

「書は日本を代表する芸術である」という強い信念を持ち、刻々と移りゆく「現代」という魔物に負けない逞しい生き方を切に希望します。院の次代を背負う戦士は多士済々であることを心強く思っています。本展出品の自分の作品や同志の作品と対話しながら、自己を見つめる機会となれば幸いです。

平成22年2月

財団法人書道芸術院

理事長　恩地　春洋

右は、会員用の63回展出品者名簿（赤表紙）の「まえがき」です。

募集規定で目標を掲げ、結果が出て反省の意味を込めて赤表紙にも書いてきました。「忙しいから君、書いておいてくれるか」と種谷扇舟先生に言われて書いたのが初めで、代わりに書いたのも含めれば、凡そ20年くらい続けました。毎年、同じことは書くまいと苦労したことでした。

気力に満ちた八十年
―前衛作家浜谷芳仙さん―

総合団体書道芸術院は、寄り合い世帯、各部毎に自由な芸術活動が出来るが、競争相手が少ないために、ともすれば、作品水準が落ち易い。作品をよくするために「作家集団を目ざす」と目標を設定したのは当然のことでありました。

院の創立当初「前衛の書道芸術院」と脚光を浴びたこともある院の前衛書も、他部門と同じく、攻めあぐんで低迷の時期を迎えた頃でした。そんな時代背景の中で、院の前衛書部は、研究会活動を開始しました。村野大仙、香川倫子両先輩を中心に、浜谷芳仙さんがまとめ役として、運営に、研究に、取り組みました。そして、低迷の書道界に「前衛の書道芸術院」の再来かと、その元気な姿を印象づけたことでした。

芳仙さんの作品は、いつ見ても、若々しく気力十分で、エネルギーに満ちています。その作風は、師中島邑水、深松海月先生の理念を継承すると共に、更に技法を発展させて、間違いなく、日本の前衛書の一角を担って輝いています。

芳仙さんは又、会の運営についても確固とした見識と才能を発揮されました。

書道芸術院の最高幹部として組織をしっかりと支えて頂きました。

地元では、海月先生の後、書径舎の方々をまとめ、力強い軍団として育てあげました。

毎日北陸巡回展の実行委員長を二度も務められ、侍の多い、富山、石川、福井の他会派の方々から、気配りのある企画と運営で信望を集めておられることを共に喜びたいと思います。

「生きる」ということは、「生」との格闘であり、芸術はその生きざまの記録であります。今回の書展は、八十年間の前衛作家、芳仙芸術の成果であり、人間芳仙の全貌を見る機会として楽しみにしています。

（H22・1・15　春洋稿）

浜谷芳仙傘寿書展

・3月20日(土)～22日(月)

・高周波文化ホール（射水市）

東　素子・素朴ニ墨展
「民芸品を加工した額に応用」

21世紀の書
―私の主張―

前衛書 (五)

千葉蒼玄

千住博の「ウォーターフォール」はそれまでの日本画にはない手法を使い滝のイメージを完成させた。その作成過程の中で彼は〝巨大な水の固まりが上から下に落ちてくる迫力を描きたいと思ったが、ちまちま描いていたのではそれは表現できないだろうとジレンマがあった。その模索のなかでふと絵の具を上から流していた。そういうことが絵画として許されるか許されないか考える前に、どうしてもそうせざるを得ないという内的な欲求があった〟と述べている。滝自体は具象的なものであるが、作品を見ると、水が流れ落ちるイメージを抽象化したように思える。書において筆墨紙は文房四宝の重要な要素であるが、この一つを別の物に替えればどうなるかに挑戦した時期があった。

掲載の作品はケント紙にアクリル絵の具を使い上からたらすという技法を試みた。このたらすと言うことは筆を一切使っていないので筆触という面では書より絵に近いかもしれないが、それが筆触をもって文字として凝縮する課程を楽しんだ。もちろん下は文字である。〝陽炎を見ずして陽炎の中にいる〟文意を汲み陽炎の中に絵と書が混在しているような情景を表現したつもりである。

新しい物を作り出す時には〝反逆者〟というレッテルがつく、それが認められたとき〝開拓者〟となる。なにごとも恐れずに挑戦することが前衛の精神だと考える。

平成二十一年宮城県芸術祭書道展出品　千葉蒼玄書

270×120cm

漢字 (五)

前田龍雲

臨書をするときには、ほとんどの方が法帖の出版（印刷）物を見て書かれていることでしょう。もちろん拓本や拓本の法帖を収蔵されている方々はこれらを見ておられるでしょうが、実際臨書されるときは、やはり印刷物を見ておられると思います。かくある私も出版物の利用者であります。

先日、プロの報道カメラマンと話す機会があり、そのお話の中に、「最近は携帯電話の写メールやデジタルカメラが普及して、皆がカメラマンだが、よく見るとモニターの画像しか見ていない。実際の被写体を自分の目で見ていない。そしてシャッターを押し、記録して見た気になっている。本物を見ていないから怖い。」とおっしゃっていました。衝撃と感銘を受けた含蓄のある言葉でした。やはり実物・本物を見て脳裏に焼き付けないといけない。確かに情報過多のこの時代に本物を見極める審美眼も衰えてきているように感じます。これにはいろいろな物を見て場数を踏むほか無いように思います。

書道芸術院の単位認定講習会に参加された方は、原拓書道史の講義で拓本の実物を目にされておられます。本物の拓本に触れる機会を大切にしたいと思います。そして、欲をいえば本物の碑や肉筆を見る機会を出来るだけ多く持ちたいと思います。また、素晴らしいといわれる作品にも出来るだけ接したい。その上で臨書をすれば、そして、作品を制作すれば、より深みのあるものが生まれるのではないでしょうか。

第三回墨土舎展（二〇〇九年）出品　前田龍雲書

180×60cm

〈和光ホール31人展〉

〈離〉　恩地春洋

66×69㎝

〈白妙の〉片山由美子　辻元大雲

105×135㎝

現代の書新春展

今いきづく墨の華

和光ホール31人展

セントラル会場100人展

2010年1月5日(火)～10日(日)
銀座・和光本館6階

2010年1月4日(月)～10日(日)
東京セントラル美術館

主催・毎日新聞社
(財)毎日書道会

〈セントラル美術館会場100人展〉

〈寿〉 村野大仙

97×165㎝

〈集〉 小伏竹村

120×120㎝

〈受〉 香川倫子

125×181㎝

〈谷〉 浜谷芳仙

178×119㎝

〈含一〉 大野祥雲

97×181㎝

〈光太郎の詩魂に〉
自作（高村光太郎の詩に和す）
飯高和子

65×138㎝×2

〈春雨〉光厳院

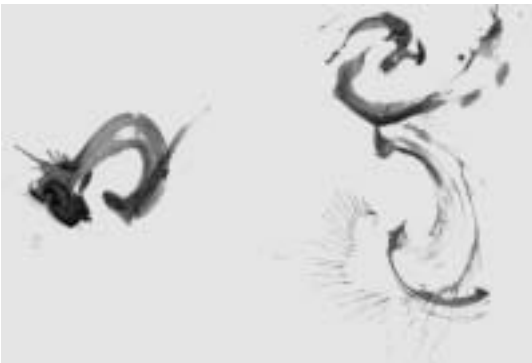
石井明子　81×153㎝

〈和〉三村紘司

小竹石雲

236×90㎝

〈一意による〉



板垣洞仙　120×179㎝

〈長谷川櫂の句〉

砂本杏花

135×105㎝

〈歓〉

小伏小扇

180×120㎝

書話シリーズ 384

『スランプ脱出法』

佐藤希雲
（かな部・審査会員）

稽古ということばの意味は、昔のことを追体験するということで、先人が学んだことを自ら習う（倣う）ことに他ならない。書にせよ武道にせよ、稽古が重視されるのは、精神的な部分が大きいと思う。しかし、現実的には練習量が問題にされるだろう。確かに、練習量に比例して技術は高まるものだ。

そうは言っても、いくら書いてもうまくならない時期は誰にもあるもので、これをスランプと言う。練習すればするほど、下手になるような気もして滅入ってしまう。こんな時は、「視点を変える」のが特効薬になる。自分のこだわりをいったん捨ててみて、いろいろな視点を知ることが解決につながる。以下、私の経験を述べることとする。

……　……　……　……　……

①「リカバリーの連続」

ある日、何気なくスキーの雑誌を見ていたら「スキーとはリカバリーの連続である」ということばが目に入った。プロスキーヤーは事前に理想のターンを思い描いてから滑り出すが、必ずどこかでズレが生じ、それを戻そうとする。その繰り返しでレースは終わってしまい、理想の滑りなど実現したことがない、とのこと。これを読んだ瞬間、書も同じだ、と悟った。法帖やら手本やらを横に置き、そっくりに書くのが書であると思っていたが、そうではないのである。ズレるのが当たり前、ズレたあとどう修正するか、いや、そのズレをどう生かしていくか考えるべきである。「書もリカバリーの連続」。そう思えた時、書作がとても楽しくなった。十二年ほど前の出来事である。

②「折り目」

楷書や行書を半紙に数文字書く時、折り目をつけていた。思うところがあり、その習慣を改めてみた。最初は苦痛だったが、やがて慣れた。すると、条幅を書く際に余白を意識できるようになった。

③「筆の原理」

筆記具としての筆の特性は、その先端だけでなく穂の腹や根元でも書けるということと、穂先が最初に紙に触れて、そして最後に穂先が紙から離れるということである。線の最後の仕上げを穂先が受け持っていることになる。自分の作品になんとなく潤いが欠けていると感じた時は、この原理を忘れていることが多い。

④「仮名の基本」

もちろん直筆が基本であるが、穂先の運動が大切である。穂先を沈めれば太さが表現でき、穂先を立てれば細い線となる。連綿の中で「沈めて立てて」を意識するとリズムが出てくる。さらに運腕に大きさと遅速の変化をつけて縦への流れを頭に入れれば、仮名らしい作品が書ける。紙と穂先がこすれて小気味よい音が出てくるようになれば、基本は習得できたということになる。

⑤「左側筆」

大学3年の時、初めて書道の授業を受けた。講師は高木東扇先生で、授業の課題以外に本阿弥切の臨書を添削していただいたことがある。その時、筆管を左に倒し、穂先を線の右側に通す技術があることを教わった。残念ながらどの箇所で使うかは忘れてしまったが、自分なりに取り入れている。

⑥「淡墨の作り方」

数年前、野口白汀先生の講座を受講する機会があった。墨の磨り方を教わったが、私が持参した墨と硯で淡墨を作っていただけて感激した。以来、その方法をアレンジして行っている。

・硯の岡に数滴、天然水を垂らす。
・小さい円を描くように磨る。
・靴クリームのようになったら、指で磨っていく。
・適量の天然水を加え、指でならす。
・一時間程度、放置して出来上がり。

指で体温を伝えることが、墨液の状態をよくするそうである。また、クリーム状のまま皿に移し、乾燥させ、改めてそれを磨り直す方法もある。

⑦「墨が続かなくなった時」

仮名の半切の定石として、2行目の上部を渇筆にして動きを出すというものがあるが、時として隅が続かなくなったりする。こんな時は、赤と青のポスターカラーを混ぜて紫にしてから、2滴程度墨液を入れるとよい。墨つぎの位置まで簡単に書けてしまう。これは貞政少登先生に教わった方法である。

⑧「篆刻」

数年前から篆刻を勉強しているが、書と同じである。ポイントは、

・起筆、収筆、転折に注意する。
・線の方向を同じに揃えない。
・一本の線に太い細いの変化をつける。

などである。違いは補刀がきく（やり直しができる）というところか。自分の欠点が見えて面白いものだ。最近は仮名作品に合う雅印を考えるのが楽しみである。

佐藤希雲刻

書話シリーズ 385

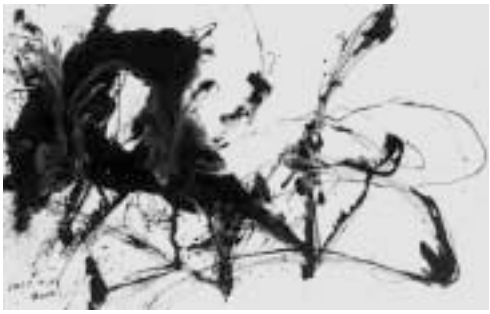
前衛書に魅せられて

小山内　景　峰
（前衛書部・審査会員）

父、師でもある、山田翠城（昭和2年～平成12年）は、元国鉄の職員で、昭和26年に結婚し、翌27年に長男誕生。その年から32年頃まで青森市の先生に付き書の勉強を始め、27年には貞翠書道会を創立し学生を指導。29年に私、長女誕生。33年頃から全日本学校書道連盟の学生展出品のため、学生達を熱く指導。当時は一人10点は当り前の時代で、条幅の全国学生書道展が2月、半紙の全国学生競書大会が7月と年二回、東京都美術館で開催されていたようです。昭和51年8月の第28回全国学生書道展（条幅・半紙）で年一回になり、その後条幅は、書初め誌上展として新に始まったようです。書の教室3月号に第31回展の力作が掲載されていました。学生は金の卵、楽しく末永く続けてくれるよう、指導していきたいものです。

昭和33年に妹、二女誕生。34年には私も習字を始めていたらしく、5才で「いも」と書いた作品と一緒に写った写真があり、35年夏の学生展へは、始めて父と上京した時に写した写真も数々あり、今でも、山手線を逆に乗ってしまい慌てた事や、宿の窓から東京タワーらしきネオンが見えた事が思い出として残っています。

いつの頃かはっきり分かりませんが、書道芸術院の展覧会を見て、その素晴らしさに感銘を受け、昭和37年に八戸市の和井田要先生に師事し、月一度、先生宅へ通う際、私も一度、要先生にお会し、白髪でウィスキーが好きな先生だと記憶しております。先生は「来る途中、何を見て、何を感じて来ましたか、自然の美を感じて来ましたか。」と言われたそうです。父は八甲田山の雲海の流れる様を書にして、「雲海」が初特選になり、嵐の海を見て、「激動」と書き連続特選を取り、会員候補となったそうです。父は、自分の実力で向上するように仕向けてくれた和井田要先生に対し、本当に良い師に巡り会える事が出来たと言っておりました。



第19回書道芸術院展（雲海）特選
山田翠城書

昭和37年10月第1回貞翠展を開催し、50年5月に第1回個展を、平成3年6月に会創立40周年記念個展を、そして、平成12年3月、第32回貞翠展が最後となりました。

先日仕事で青森市文化会館3階へ行く事になりました。そこには、同会館に寄贈した「射」（180×180）の大作があり、久し振りに父の50代の作品（第36回院展青森県地区展出品作、昭和58年5月、57才）に会い、パワーを貰う事が出来ました。

昭和62年第40回院展から、子育てが一段落した私が、書道芸術競書を10級から始める事になりましたが、父亡き後、平成15年2月に母も亡くなり、他県在中の兄妹に代り、今では、出勤前に書道会（土・日開会）のある実家に寄り、神・仏にお参りする事が、私の心の支えになっているようです。

生前父は、割と無頓着で、画仙紙や墨色には余り拘らず指導されたおかげで、墨液の超濃墨で書作し、墨を擦って書いた事が余りなく、今になって、画仙紙・墨色・印泥の勉強をしているという状態で、諸先生にご指導を頂いて、大変有り難く、感謝に堪えません。

書の教室も小学生から中学生へ、中学生から高校生へ、そして書道芸術へ続けていく事が、私達指導者としての役目と思い、日々勉強していきたいと思っております。又、前衛書の研究にも邁進していきたいと思っております。

書話シリーズ⑲で、山田翠城も「棟方志功画伯言行録」と題して寄稿しておりました。

小山内　景　峰　書

祭姪文稿（顔真卿）②

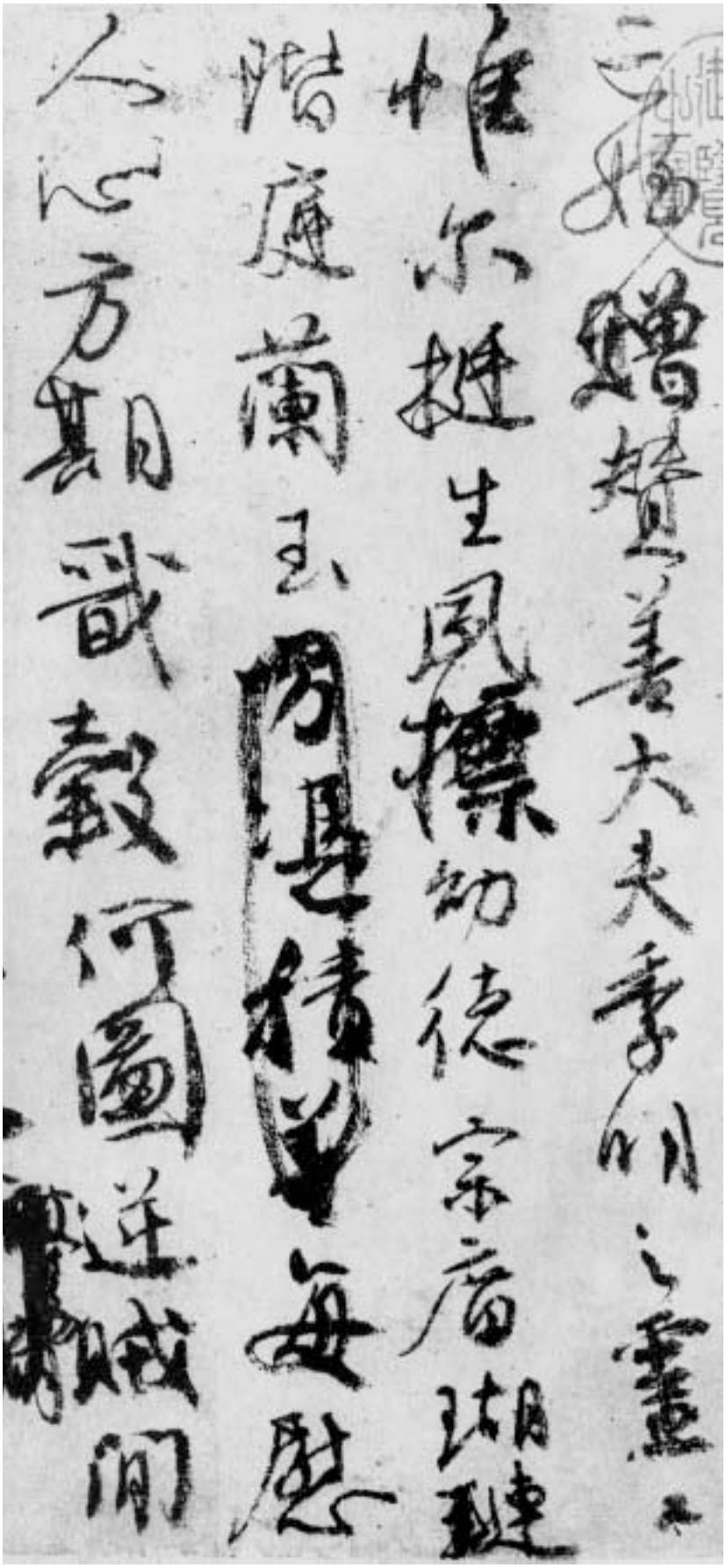
〈解説〉顔真卿は、王羲之の古法を規範とした。そして自らの信念による新しい直筆法を開拓実践し、羲之以前の直筆とは違った新法を生み出した。いわゆる「顔法」である。祭姪文稿は、彼の悲痛と義憤が筆致に表れ、いたるところに文字の塗抹があり右横または左横に書き直したところもある。哀傷する心情が渾然一体となって書に美しく昇華している。さらに行間には、加筆が多い。（編集部）

用紙　半紙普通判

＝注＝

左記の法帖の中から何文字臨書してもよい。（掲載部分以外は不可）

※落款を必ず入れる
署名、
もしくは○○臨
（押印のみも可）



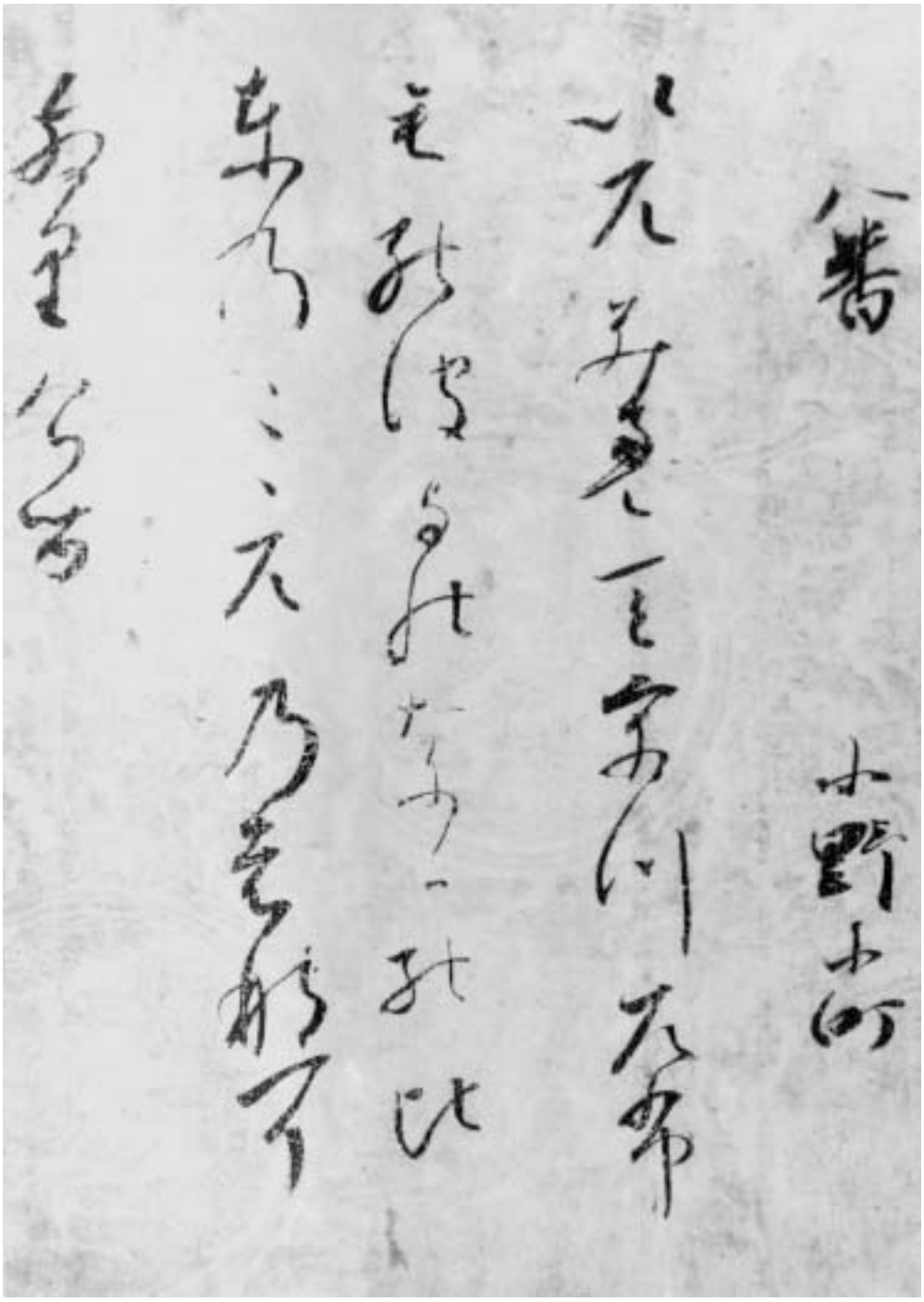
亡姪・贈贊善大夫季明之靈。／惟爾挺生。夙標幼德。宗廟瑚璉。／階庭蘭玉。每慰／人心。方期戩穀。何圖逆賊間／

古筆鑑賞

⑪

かな研究部

十五番歌合（伝・藤原伊房）②



※上記の掲載歌一首以上を書く用紙・半紙普通判（料紙可）

※落款を必ず入れる。○○臨（押印のみも可）

〈よみ〉

八番　　小野小町

い呂美盈天宇川呂布

毛能波与能奈可能比

東乃こゝ呂乃者那耳

散里介留

〈解説〉

有名な歌人三十人（紀貫之、素性、在原業平、小野小町、小大君、柿本人麿、山部赤人など）の秀歌三十首を十五組に分けて十五番の組み合わせを作ったが、この歌合形式による一つの歌学書として書写されたものである。

草かなを主にした字形は、やや扁平で、縦画が太く、横画はやや細い。

（編集部）

漢字規定　初段以上【三月十五日締めきり】用紙　半紙普通判

辻元大雲選書

春近有梅知　よみ（春近ければ梅有るを知る）

書体＝自由

習い方解説（五）

辻元大雲

春近有梅知
（春近ければ梅有るを知る）
戴良

今回から五文字です。春を待ちわびるほのかな情感の語です。

柔らかな雰囲気を醸し出すねらいからしっとりした行書表現としました。筆は羊毫中鋒でやや先寄せの筆を使いました。

筆の選択は仲々難しいものです。ついつい使い慣れた筆ばかりで、毎回変り映えしない表現となっていませんか。毛質や構造上の違いで線質は大きく変ります。筆先をすいてある筆は鋭い線の表現に、先寄せ筆は厚味のある線に向くなど色々です。筆を分けへだてせず使ってあげましょう。

漢字規定 秀級以下【三月十五日締めきり】用紙 半紙普通判

小伏小扇選書

大道無門 よみ（大道無門）

書体＝楷書

習い方解説 (五)

小伏小扇

大道無門（大道無門）

禅のことばで大道には門はない。出入り自由で一切が門であること。

「大」 左払いと右払いが互に呼び合うように。

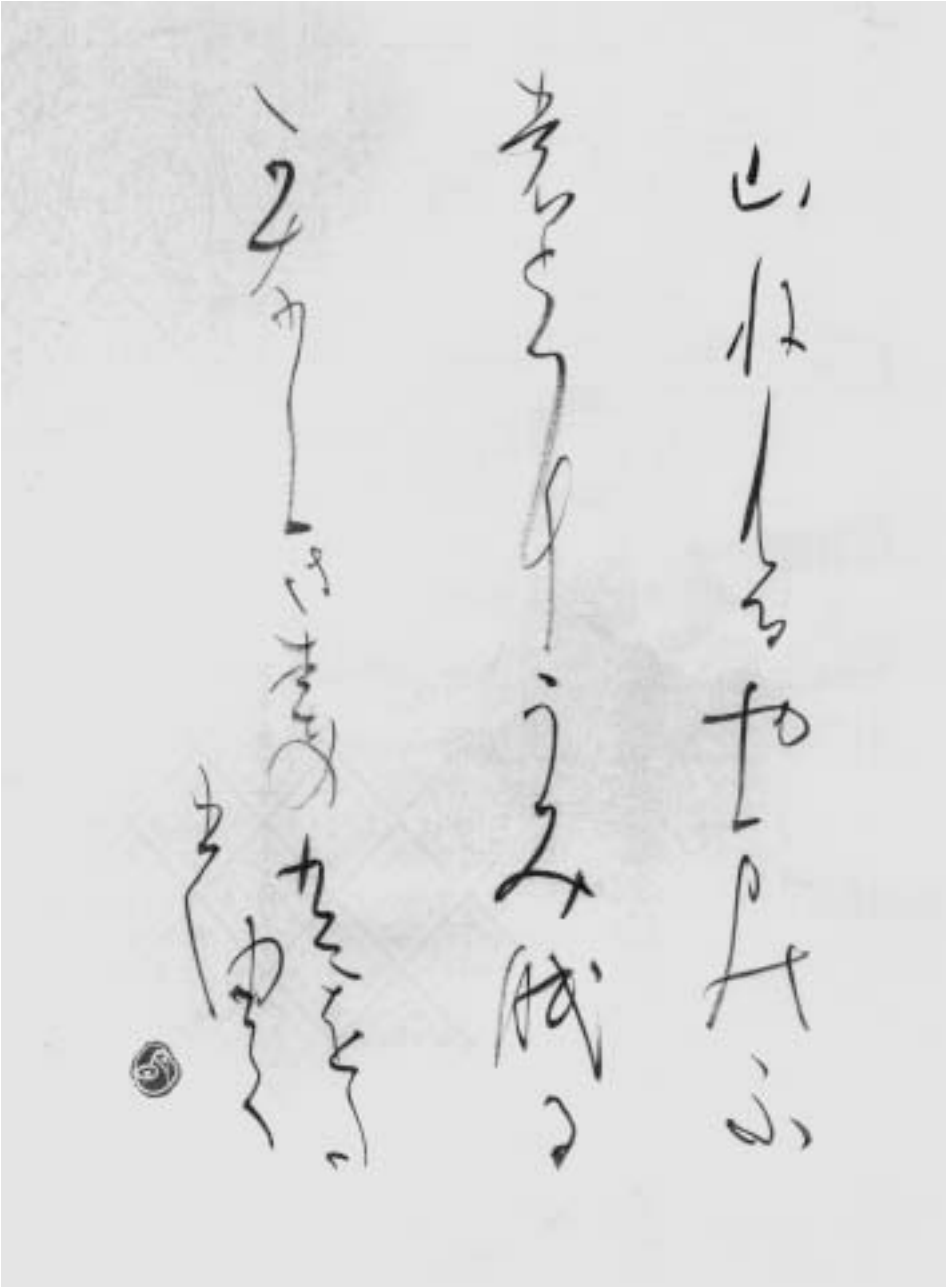
「道」 旁としんにょうが、くっつかないように充分に余裕をとる。

「無」 三本のよこ画の間合いに注意。列火はひとつ一つに表情がある。

「門」 堂々とした門になるように少し背勢にとる。

かな規定　初段以上【三月十五日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）

石井明子選書



よみ方　山ねむ(无)るやま(万)の(能)ふも(裳)とに(耳)うみ眠る(留)か(可)な(奈)しき春のく(九)に(二)をた(多)び(悲)ゆ(由)く(久)

創作

習い方解説 (五)

石井明子

山ねむる山のふもとに海ねむる
かなしき春の国を旅ゆく
（若山牧水）

牧水の世界は何かしっくりと身に添う気がして親しんできました。中でもこの歌の「かなしき春の国」で現わされる複雑な精神にひかれます。酒と旅を愛した歌人の力でしょう。

構成は単純にしました。散らし書きより少しだけ字粒を大きくし、勢いのある運筆も意識しました。

最近、かなの個展をいくつか見る機会に恵まれました。感じたことは、一人の人の表現は、いずれも必ずしも多様性がある訳ではないということでした。長年の研鑽の後、独自のスタイルを手に入れた人のみがなし得る自然体に見える書きぶりが、私達を引きつける魅力となっているのでした。古筆から学ぶことと共通するものがあり、深い教えとなりました。

かな規定　秀級以下　【三月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

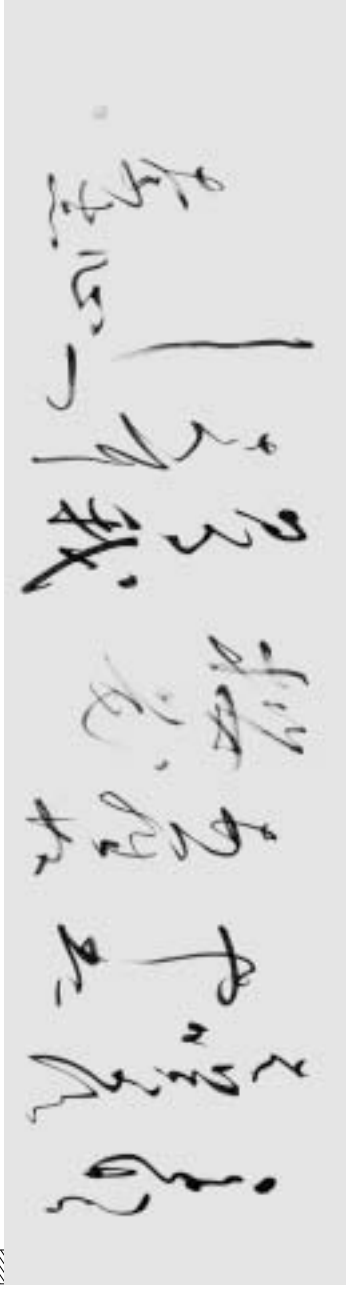
掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。

高野切第三種
（掲載写真縮小93％）

よみ方　はるのゝの(能)しげ(遣)き(支)く(久)さばのつまこひに(尓)
とびた(多)つきじのほろゝとぞな(那)く(久)

かな条幅規定　【三月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

平川峰子選書



よみ方　ことな(那)らば(者)咲か(可)ず(須)やは(盤)あら(羅)ぬ
桜花見る我さへに(耳)しづ心な(奈)し(志)

創作

出品券貼付位置

習い方解説（二）

平川峰子

ことならば咲かずやはあらぬ
桜花見る我さへにしづ心なし
（紀貫之・古今和歌集）

ことならば…同じことならば

歌意は「どうせ散るなら、咲かないでいられなかったのか、見ている私まで心が安まらない」

横作品の制作ポイントは、行間の余白、墨量の変化（途中、墨量が多い場合は、反古紙で墨を取りながら書くとよい）、山場というか見せ場をどこに決めるかです。作品に奥行きを作ってください。

※よこ形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【三月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

広瀬舟雲選書

二月江南鶯亂飛　百花滿樹柳依依
（二月江南鶯乱れ飛び　百花は樹にも満ち柳は依依たり）

書体＝自由

習い方解説　(五)

広瀬舟雲

一般的に「亂」は旧字体、「乱」は新字体といいますが、実は「乱」という字形は昔からあった異体字であり、戦後その字形が新字体として採用された漢字なので、旧字体の「鶯」と、異体字としての「乱」の併用はここでは構いません。字書で確認してみてください。鶯の乱れ飛ぶ様子を穂先のよく利く長鋒を自在に駆使して表現してみました。

漢字条幅規定　秀級以下【三月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切

横谷尚恵選書

風暖鳥聲碎　日高花影重
（風暖かにして鳥聲碎（ちょうせいくだ）け　日高くして花影重（かえいかさ）なる）

書体＝自由

習い方解説　(五)

横谷尚恵

句意「早春のおだやかな風光の奥に仏性の深く暖い心を喩される。」春を待つ暖かな心待ちになって書いてみたいと思います。

ペン字規定【三月十五日締めきり】

川島舟錦選書

朝は鳥になって
あなたを目覚めさせる
夜は星になって
あなたを見守る
「千の風になって」より 舟錦かく

用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、**黒インク**使用のこと

書体＝自由

習い方解説 (五)

川島舟錦

『〝いのち〟の有り様は、文字通り千差万別で、この地球上には無数のいのちが共存している。人間も、その中のワン・オブ・ゼムにすぎない。人間としての役割を終えたあと、まずは風になり、大空を吹きわたる。次に雪や光や雨になり、鳥や星に姿を変えて、さらにさらに生きつづける。即ち、この地球上で太古の昔からえいえいといとなまれてきた〝いのちの大きな循環〟の中にくみこまれる、というわけだ。』（新井満著『千の風になって』講談社）より

この歌詞は、私達をやさしくつつみ、見守ってくれている人達を思い出させてくれます。何度もくり返し練習しながら、それぞれに思いを馳せることができます。

※落款を入れ忘れないようにしてください。（落款は**自分の名前**を入れてください。）

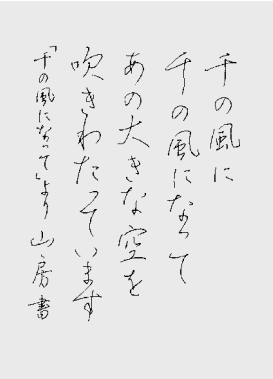
今月のホープ作品 各部総評

NO.584

ペン字部　師範　工藤　山房

流麗でありながら深みのある線質が一字一字を輝かせている。暖かで味わい深い見事な作品です。

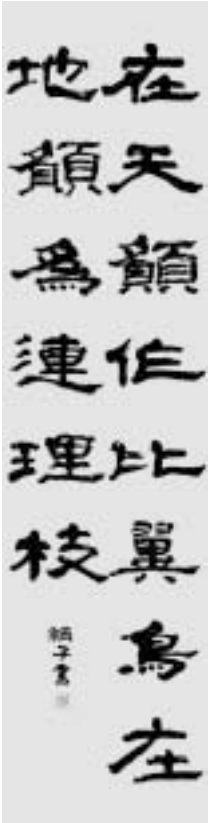
◎ペン字部総評　構成は比較的よくとれていたが、全体の流れや伸びやかさに「もうひと工夫を」、の感があった。（孝予評）



漢字条幅部　師範　東平　絹子

滋味溢れる鄧完白の気風をよく体得され、安定感ある作。適度な渇筆が効果的で今後に期待したい。

◎漢字条幅部総評　課題語句により書きにくさを感ずる方もあると思うがそこが勉強の仕所である。多面な研究工夫を望む。（大雲評）



現代詩文書部　特選　原田　寛

筆が開きうねる。筆圧と紙の抵抗がつくり出す柔らかく魅力的な線質「と」「も」素晴らしい。

◎現代詩文書部総評　墨の持つ美しさをもっと引き出す作品を望む。少し無頓着な作品多い。（素雪評）

前衛書部　特選　土屋　光燁

白と黒の調和、紙面いっぱいに躍動し、線の強さと渇筆を生かした豪快な力作。

◎前衛書部総評　前衛書の魅力が作品に多く現われ、成果上、今後の発展につなげたい。（光昭評）

かな条幅部　準師範　関田　洋子

シンプルで清楚な雰囲気に好感を持ちました。墨量の制御がよく収めの四字の布置は見事です。

◎かな条幅部総評　誤字少なく無難な仕上りが多かった。更に墨色墨量に配慮のこと。落款までが作品であると認識のこと。（明子評）

漢字部　師範　山田　悦睿

濃墨で確かな筆致で、つよくて暖かく、詩情豊かな明るい作となった。まとめ方もよい。

◎漢字部総評　各書体の学書、特に古文字については正確に字形を書くこと。現代の感覚を追う人は書法技術の裏づけ更に。（春洋評）

かな部　師範　猪又　理扇

粗削りだが、何より線やリズムに勢いがあり、思わず引き込まれる書き振りです。構成も理に適う。

◎かな部総評　いつもの紙面に俳句となるとある程度の大胆さや大きさが必要です。過剰、過小、何れも美しく感じません。（洋子評）

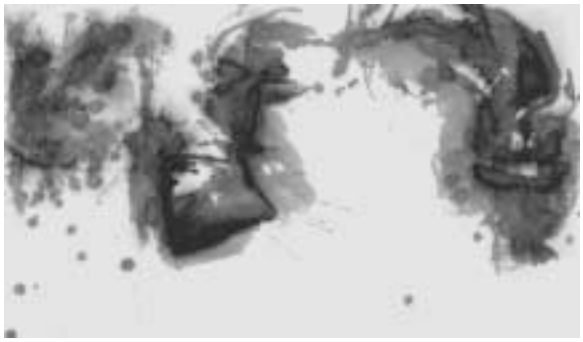
今月の特別研究部優秀作品（特選）

前衛書

（四谷）

野口加奈

「芯」



野口加奈書

70×120㎝

◆左から右へ大胆な筆づかいで迫力ある作。上部に密集させ、下部に明るい余白を配置した構成に大きな広がりを感ずる。今後に期待したい。（大雲評）

◆この迫り来るものは何？技術ではない深い思いを、余白が静かに語っています。稍、邪魔な飛沫を感じてしまうのは、私だけ？（明子評）

◆淡い墨の濃淡を散りばめて、心の照りかげりを表現する。右の明るさに比べて、左端の線とならない滴りに作者の心の奥を見たように思う。（春洋評）

◆体の力全部を線に集中して仕上げた作品。呼吸するように筆を使った結果が作品に流れを生ませたのでは。この一つの流れを忘れぬように。（倫子評）

現代詩文書

（もくせい）

西川藤象

「海保俊郎の詩」

西川藤象書

174×45㎝

◆淡々とした表現に見えながら、その線の多様さには驚かされます。隣りあう字の線の変化は余程考えての上か、生まれてしまったのか？（明子評）

◆淡墨で早春をうたった抒情詩を縦長二行にうまくまとめた。まだ雪の残る自然の厳しさが線質にもう少し欲しい。青墨の使い方に一工夫を。（春洋評）

◆紙に合せて墨色を上手に出している。筆力も軽妙に使って、にじみ、かすれを詩の言葉の動きに合わせ読む者の心に流れを感じさせてくれる。（倫子評）

◆暢びやかな筆致が淡墨の情感をさらに引き出し、明るく爽やかな作。ややひきしめた字形が余白をすっきりとさせるが縦の流れにもう一工夫。（大雲評）

総評

芸術の独自性とは何であろう。私たちは作品を作り出すために古典の臨書をするがそのままでは独自の作品は生まれない。それではいつ、その独自性は生まれるのだろうか。絶えず学びまた注意を回りに向けることにより感覚が研ぎすまされてくるのだと思う。私たちの生活は書道だけではない。1日のほとんどがほかの刺激によるものと言っても過言ではない。この周りから受ける感覚に目を向けそれを作品として実験することにより新しい作品は生まれるのではないだろうか。

今回は82点（漢21、か12、現30、前18、篆1）新しい感覚の作品の発表を期待する。（蒼玄）

〈特選候補者〉

漢	玄穹	千葉 紅雪	か	書泉	田子 白嶺
〃	眩耀	佐々木青霞	〃	卯月	栗原 信子
〃	墨宣	小林 翠芳	前	蓮紅	大友 紅蓉
現	声香	米倉 聲香	〃	蓮紅	一條 紅蕭
〃	大雲	長島 僊雨	〃	蓮紅	遊佐 紅雅
〃	大雲	神谷 雲卿	〃	四谷	鈴木 白鷺
〃	翠柳	加藤 紫翠			

かな　（卯月）

前田まさ美

「竹馬やいろはに…」
（久保田万太郎）

前田まさ美書

126×60㎝

◆書き出しを渇筆で、中央部に重量感ある潤筆部の構成は大胆で新鮮である。三行目の線やや甘く、厳しく切り込む冴えがあればと思う。（大雲評）

◆まさに挑戦した作品です。かなの概念にとらわれない精神の自由さが何とも羨しい。ためらいなく進んで、次の新しい世界を見せてください。（明子評）

◆現代詩書への大胆な試行作品、唐紙に情熱をぶっつけて、従来のかな作品とは全く異る。大きい字となるので運筆の技法がテーマとなろう。（春洋評）

◆筆が荒れているのを上手に使い、そのかすれが全体にすごく生きている感。歌声が作品から響いてくるようで楽しく拝見させていただいた。（倫子評）

現代詩文書　（游水）

荒川空華

「銀色夏生の詩」

荒川空華書

136×60㎝

◆下のつぼまりに全体をまとめ大きな紙にちゃんと収っている。横広の字もあまり気にならずに一つの流れとして受けとめられ楽しい作品。（倫子評）

◆中央部に大胆に大字、細字を配し、作者の制作意図、姿勢が観者を魅きつける。柔らかな渇筆がリズムを醸し出し、落款の配置も妙。（大雲評）

◆美しい墨遊びの芸術が、詩として読むことなど、どうでもよいことと教えてくれる。前衛書はどの分野にも存り人の感性を刺激して快い。（明子評）

◆「返事はまだない」から天を仰ぐように広げた構成は面白い。上部の「霧の朝」は作意に無理があるようだが、大胆な実験作と評価したい。（春洋評）

漢字　（一弦）

木村貴衣

「放鷹」

木村貴衣書

178×60㎝

◆迫力で抜群に引きつけられ、決して発散ではない込められた力に圧倒されました。生まれいずる力が創ってくれて技術も高い秀作です。（明子評）

◆豪放な書きっぷりよし、白い空間を抱く造形を意識すれば更にスケールが大きくなろう。少し青墨を混ぜると墨色が柔らかくなって落ちつく。（春洋評）

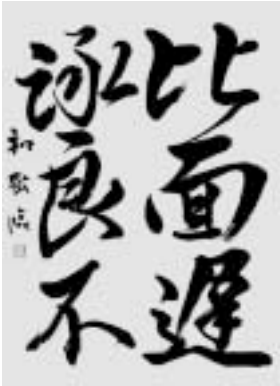
◆体全部の力を出してこの作品を造り出した感がします。濃墨だと筆も重くなりますがその力を上手にコントロールして書き上げた快作。（倫子評）

◆たっぷりした濃墨で大字二文字を大胆に表現した姿勢を買う。やや粗さが目立つが、紙をもう少し柔軟な質のもの選べば変るかも。（大雲評）

漢字研究部
（喪乱帖）

選評　大野祥雲

今月のホープ作品



河合和敬

漢字研究部　特選　河合　和敬

二謝帖の用筆・運筆法をよく理解し、一点一画迷いなく自信に満ちた作。「詠」字の中の点は、もとよりこの字を抹消するための点ではないか、と考えられており、省略されたのだと思う。益々のご精進を祈りたい。

◎漢字研究部総評

「二謝とはお会いになりましたか」で始まる短い手紙だが、文意ははっきりしない。また文字についても、遅、詠、羲、女、想、當など、字典で確かめたい文字もある。

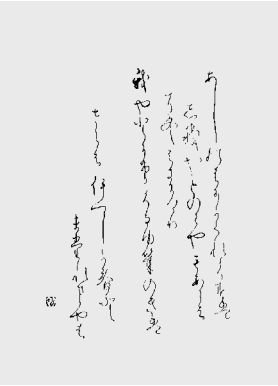
競書作品の中には、文字の大小、線の太細、筆順などに関係なく我が道を行く、感じの作品もあった。今回の課題、字数は少ないが、運筆の遅速、筆圧の強弱から生まれる変化に富んだ文字が多い。上位の方、原帖の特徴を摑み、意欲あふれる快作もあってよかった。

蒼竹　光子　匡子　谷恵　山子　裕侑子　初江　麻美　紅華　赤紅　恵子　恵舟　博史　白珠　青山　良子　瑞兆　華炎　桂久　蹊美　萩翠　波苑　篁右　菜光

かな研究部
（重之集）

選評　田村澄子

今月のホープ作品

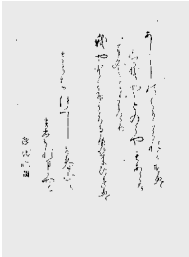


高橋初江

線質、優しくて弾力があり、墨継の濃淡が巧みでよく全面に表現でき、美しい重之集の古筆から浮き出て来たような秀れた作品になりました。

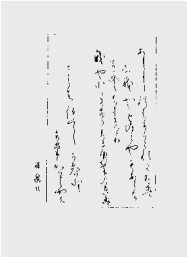
◎かな研究部総評

総体的に重之集の特色うまく表現できた作品が多く見られれしいです。何点か大き過ぎる字形もありましたが、古筆をもう一度ゆっくりと見るようにしてください。

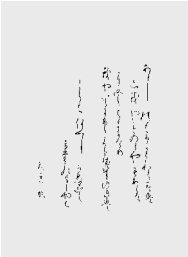


喜彩則
代雨子

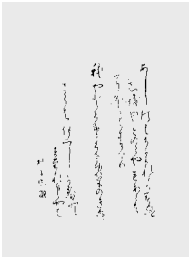
皓寿照
泉子芳



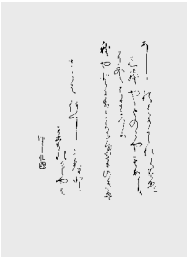
祥愛佑
泉華子



彩良美
香泉子



初江
高橋



かな研究部成績表

かな研究部　特選　高橋　初江

特選

秀作（60言層）

秀作（60言層）

佳作（60言層）

入選（60言層）

入選（60言層）

選外179名氏名略

〔特別昇級試験臨書課題〕

※左記の写真掲載部分の中から規定の文字数を臨書する。
掲載以外は違反となります。

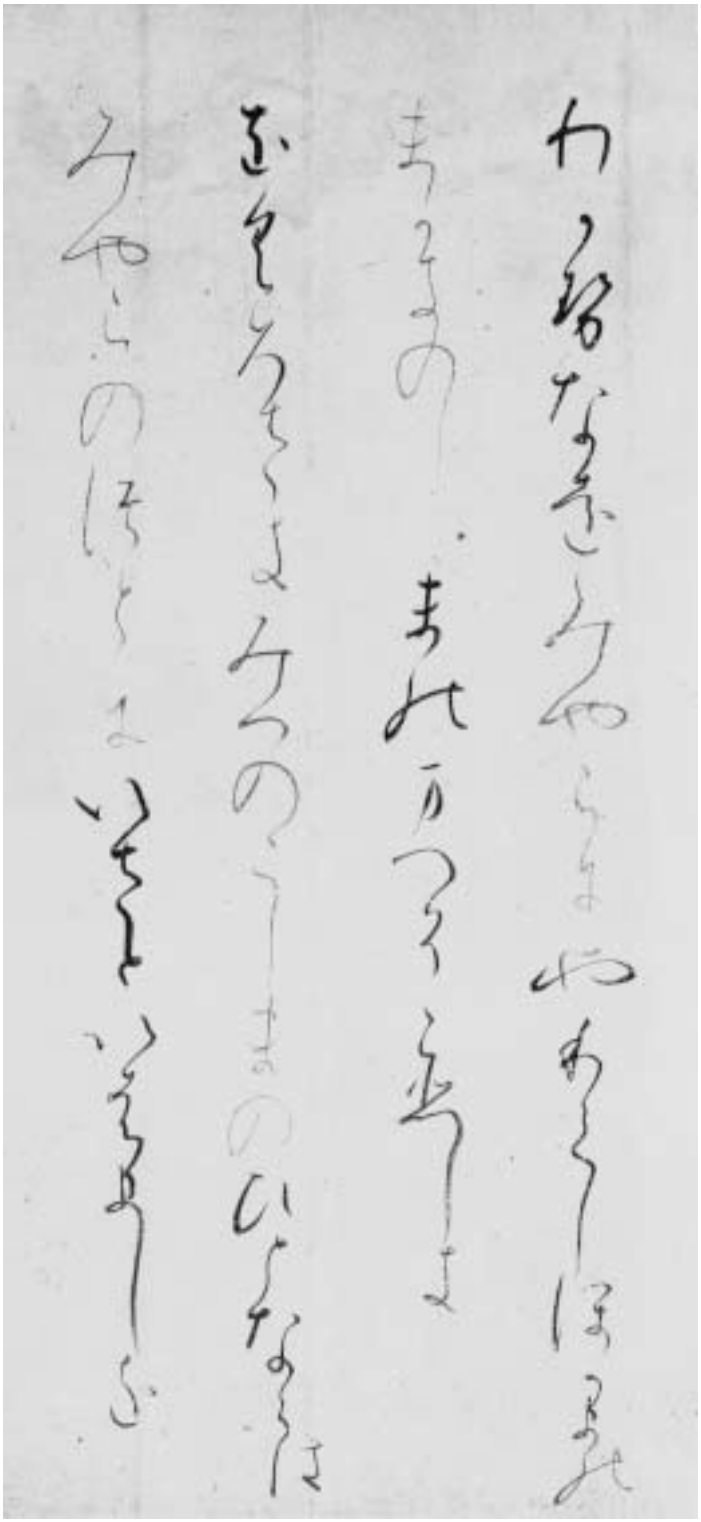
九成宮醴泉銘（楷書）　漢字部　第一種　半紙に写真掲載の中から4文字を臨書

陳。大道無レ名。上德不レ／德。玄功潛運。幾深莫レ

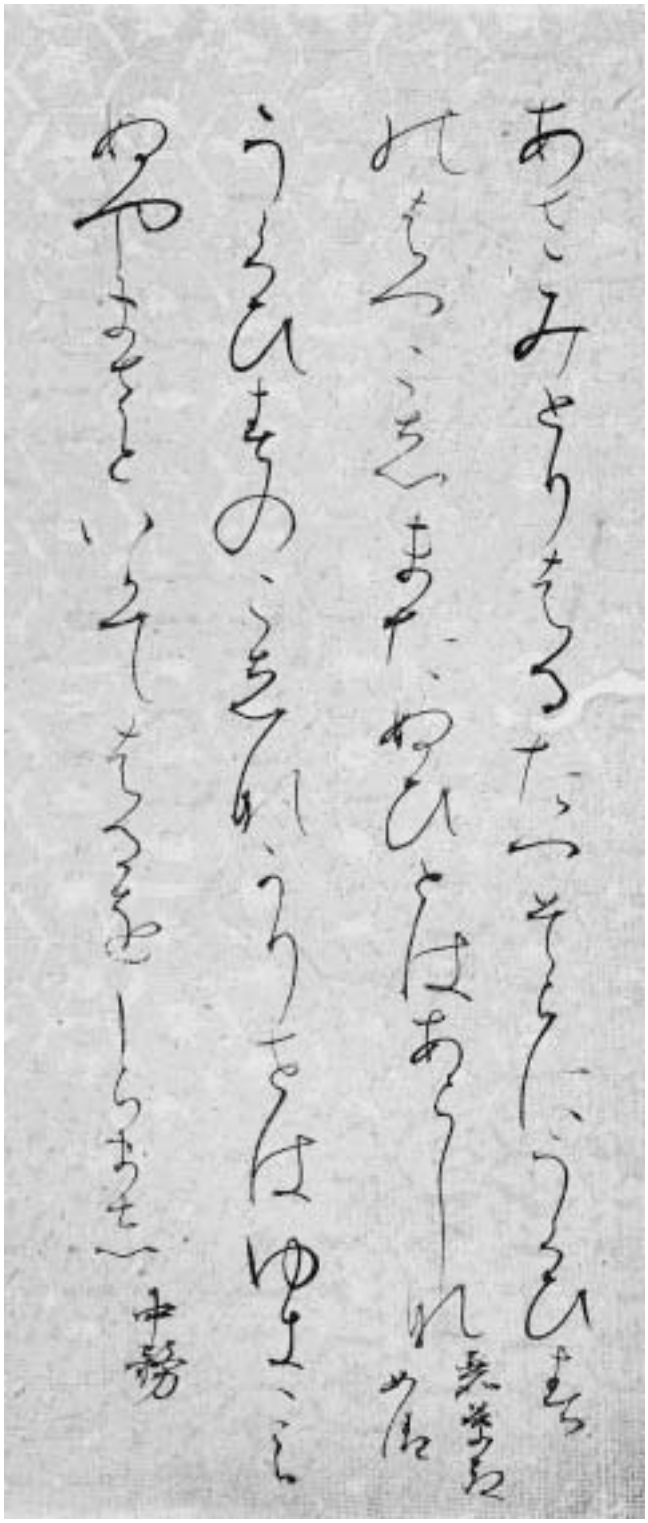
孟法師碑（楷書）　漢字部　第二種　半紙に写真掲載の中から4文字を臨書

崑閬一者上哉。若迺岱山龍／駕。傳二神丹之祕決一。秦都

高野切第一種　かな部　第一種　半紙に写真掲載の和歌・二首を書く（料紙可）



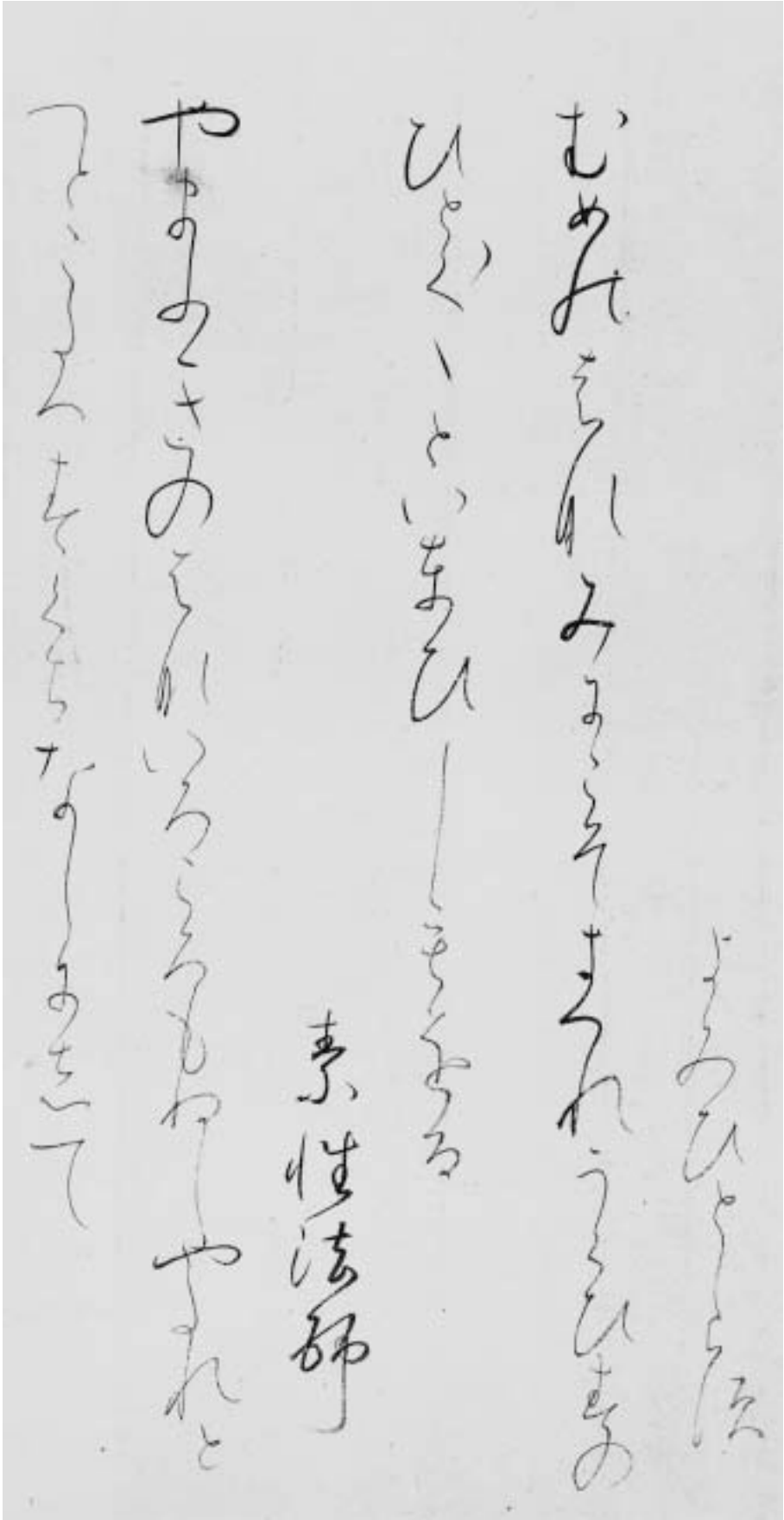
わが(可)せ(勢)な(遠)をみやこに(尓)やりて(利)しほ(弖)がま(可)の(能)／まが(可)きのしま(支)のまつ(万)ぞこ(曽)ひし(悲)き(支)
をぐ(具)ろさき(支)みつのこじまのひとならば／みやこのつと(徒)に(尓)いざといは(者)ましを



あさみどりはるたつそらにうぐひす（久春）／のはつこゑまたぬひとはあらじな（能者）

うぐひす（久春）のこゑなかりせばゆきゝえ（支）／ぬやまざといかでは（可者）るをしらまし（那可世志）

女御麗景殿　中務



よみびとしらず（須）

むめのはなみにこそきつれうぐひす（久春）の
ひとく（久）〳〵といとひしもを（東毛）る

素性法師（そせいほうし）

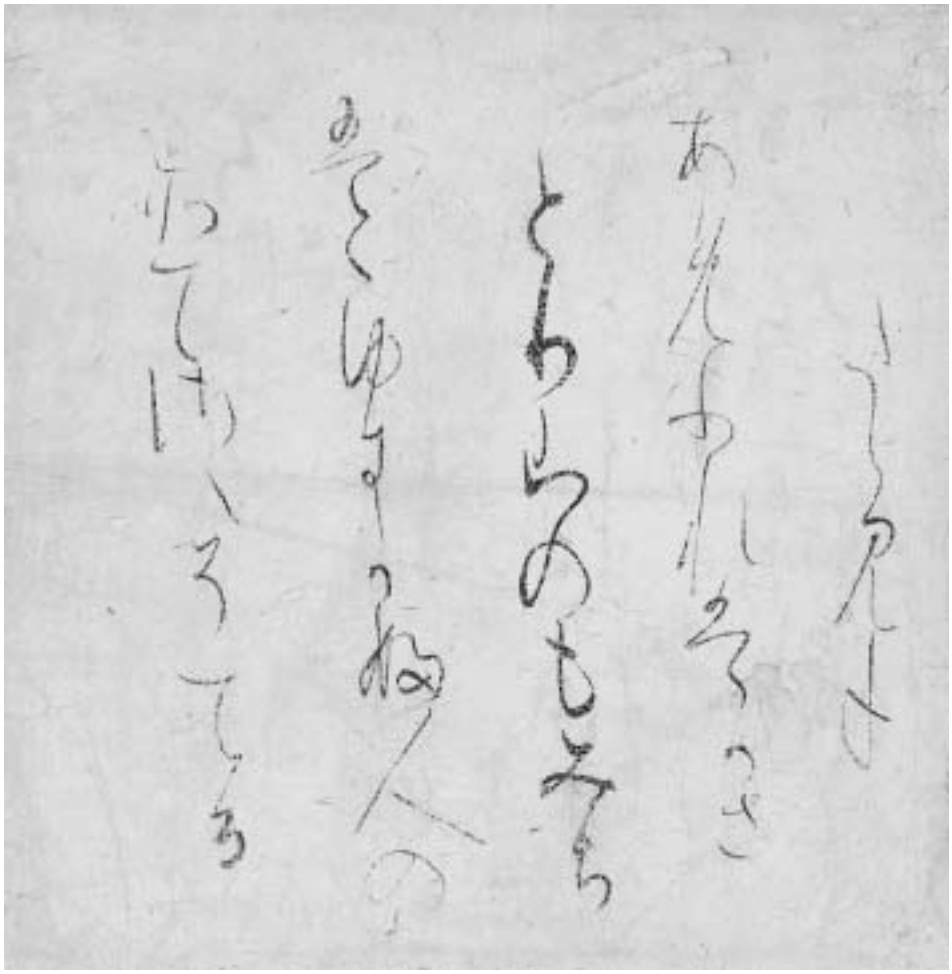
やまぶきのはない（者那）ろごろもぬしやたれ（多）と
へどこたへず（春久）くちなしにして（尓志）

寸松庵色紙　かな部　第三種　半紙に枠をとり写真掲載のうたを書く

（たて12.7センチ×よこ12.4センチの枠を半紙に書いて、その中に書くこと）

※落款は右枠内でも枠外でもかまわない

（料紙可）



たゞみね（多見年）

あめふれば（免盤可）かさ

とり山（利）のもみぢ

ばゝゆ（盤（は））きかふ（支可婦）人の

そでさへぞ（佐曽）てる

以德行詞翰爲天下所推春卿杲卿曜卿允南

顔勤礼碑（楷書）

漢字条幅部

第二種　半切に写真掲載の中から14文字を臨書

集王（字）聖教序（行書）

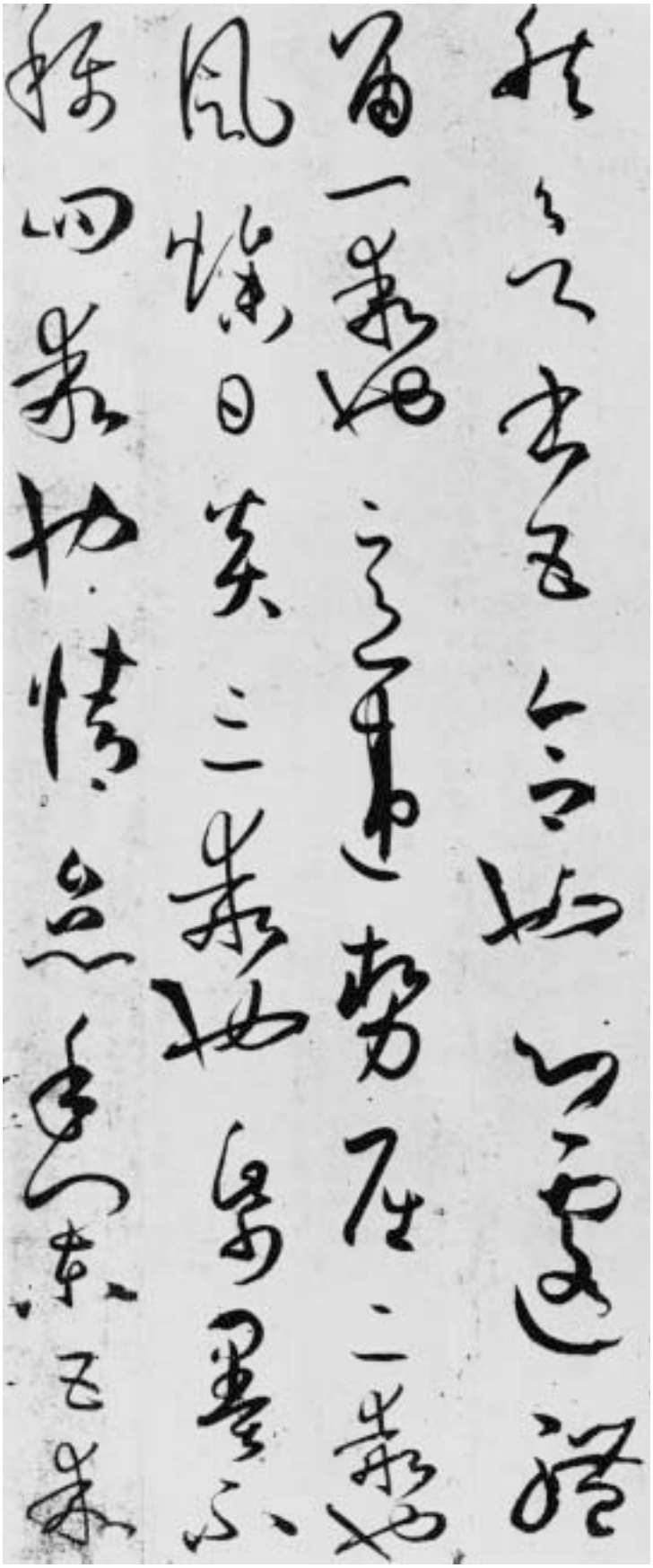
漢字条幅部

第三種　半切に写真掲載の中から20文字を臨書

蓋聞二儀有像顯覆載
以含生四時無形潛寒暑
以作物是以窺天鑑地庸
愚皆識其端明陰洞陽賢

蓋聞二儀有レ像。顯二覆載一／以含レ生。四時無レ形。潛二寒暑一／
以化レ物。是以窺レ天鑑レ地。庸／愚皆識二其端一。明レ陰洞レ陽。賢空（之心。）

漢字条幅部　第三種　半切に写真掲載の中から14文字を臨書



然欲書。五合也。心遽體／留。一乖也。意違勢屈。二乖也。
風燥日炎。三乖也。帋墨不／稱。四乖也。情怠手闌。五乖